

# 言表事態とナイ文の意味的相関性について

## ——狂言資料における——

久 山 佳 子

### 1. はじめに

本稿は中世末から近世初期の否定表現を明らかにすることを目的としている。特にコト・モノを含んだ、事ハ／モノ／ガ／ノ／ $\phi$ ナイ・事デ（ニテ）ハ／モノ／ $\phi$ ナイ・物ハ／モノ／ガナイ・物デハ／モノイの各文末形式を持つ文（以下ナイ文）を扱う。特にこれらのナイ文を考えるのは次のような理由による。文の意味内容のうちの客体的な出来事や事柄を表す部分を言表事態、発話時における話し手の言表事態に対する把握のし方の表し分けに関わる文法表現を言表事態めあてのモダリティ、発話時における話し手の発話・伝達の態度のあり方の表し分けに関わる文法表現を、発話・伝達のモダリティと定義しておく（仁田1991）、先ずナイ文の言表事態には自分自身について述べる場合や聞き手について述べる場合や一般的なことを述べる場合がある。続けてこれを一旦コト・モノでまとめ、そのまとめたものに対して、繁辞「デ」が連なる場合や、「ハ」「モ」などで取り立てたり対照化したりする場合がある。そして話し手の否定という判断が行われる。したがって、言表事態の検討／コト・モノによる纏め方／繁辞の有無／否定の焦点、などを分析的に扱うことができるためである。但し、内省を用い得ないため、文脈を精緻にたどり、語用論的な分析を加えることによって客観的な記述を目指す。

狂言資料の例を用いて考察したのは資料の均質性を重視したためである。大蔵虎清本狂言（以下虎清本）、大蔵虎明本狂言（以下虎明本）、読むために書かれたものではあるが、狂言記及び続狂言記の例を用いた。<sup>(1)</sup> 用例の所在を、虎清本は巻名・丁数・表裏・行数（清40オ8）、虎明本は巻名・巻・頁数・行数（明上92-11）、狂言記及び続狂言記は巻名・巻数・丁数・表裏・行数（記4-6オ-1）（続4-6オ-1）のように示す。

以下、コト系（コトを含む表現）とモノ系（モノを含む表現）に大別し、更にコト系をA-G、モノ系をA-Dに分類し、典型的な例を取り上げて検討する。紙幅の都合上全ての例を掲出するわけにはいかない。類例は所在を示すので参照されたい。

### 2. コト系について

A（記1-38ウ-7・2-18ウ-6）

(1) ▲女房 あ。さこは。ものいひなり。こなたは口ぶてうほうなほどに。御前さたでは。まけになりませう ▲おこ あい。こゝな人は。理を持ちながら。まけるといふ事は。ないよ ▲女房 いや。そうなおしやつそ。理が非になるは。公事の。ならひで御ざる (記2-21ウ-4)

(2) (夫) (略) さきみだれたる花どもの、物云事はなけれども、けひやうげきして、かげ口ひるをうごかせば、花の物いふは道理なり (明中230-9)

(1) (2) の言表事態「理を持ちながらまける」「さきみだれたる花どもの物云」は共に総称指示であり、共通理解としてある事物のあるべき姿に反している。(1) と(2) には「トイウ」があるかないかの差がある。(1) では「理を持ちながらまける」が不確実である (三上1955、P308)、或いは真であるという前提を含んでいない (久野1973、P139) ことを「トイウ」が表している。(1) (2) は、言表事態で述べられている事が世に当然と考えられている事に反しており、話し手はその言表事態が不成立であることを述べる。結果的に判断は客観的なものに近付くと考えられる。

B (明上92-11・382-15、明中116-7・142-12・374-7・433-14、明下95-16・112-9) 他5例

(3) (鯉) 何としようとのもんぐわいで、三つ拍子をうてば、てうしがでるを、たべると仰らるゝか (教え手) いや—そのてうしの事ではなひ、調子をぎんずるといふて、うゝ、などゝいふをてうしをぎんずるといふ (明上337-11)

(3) では聞き手(鯉)が「てうしがでるをたべる」と言ったのを受けて、話し手(教え手)が「そのてうしの事ではない、うゝなどゝいふをてうしを吟ずるといふ」と言う。このことからまず聞き手の言う「てうし(銚子)」と話し手の言う「てうし(調子)」があることがわかる。この二者は助詞「ハ」によって対比されており、排他的な関係になっている。話し手は、「(私の言っているのは) そのてうしの事ではない」と、顕在化はしていないが、話し手自身の言うテーマに対する解説をしている。この文の否定の焦点である「てうし(銚子)」が話し手の考えと不一致であるとされ、結果的にこれと排他的な関係にある話し手の言う「てうし(調子)」を指示することとなる。又、同時に繫辞「デ」によるテーマ「私の言っているの」と解説「そのてうし」の結びつきも否定されている。この場合の否定は、コピュラ全体について行われている。

C (清22オ7、明中53-2、明下187-3、記2-23ウ-10・5-16オ-7・続1-13ウ-18) 他5例

(4) (奏者) 是はいかな事、なんぢらはまんごうくじを御めんありたる程に、わらはひでかなはぬ、身共はびめいより、ひへいたをあたゝめて、おかしひ事がなひ (百姓) いや—めでたい折柄なれば御かぞうをとらせらるゝは、只今のことじや、ぜひと

もわらはしられい（明上65-3）

（4）の「事」は出来事や事件といった意味である。この場合、コトとその直前の語「おかしひ」の修飾関係は寺村1975のいう「内の関係」に相当すると考えられよう。したがって、（4）のようなコトは実質概念を持つものである。そのため、ナイ文は物事の不在を表すことになる。

D（明上308-10・417-5、続2-22オ-12・5-6ウ-4）

（5）ー ヲヤニニテ、代々アトラツグホドメデタイコトハナイホトニ、イザ弥メデタウ、ワラフテイナフトモ云（明上231-4）

（6）▲ア やいー。某も観音を信仰する故。次第に仕合もなをる。此様なうれしひことはない ▲シテ 仰らるゝ通りでござる（続2-15オ-15）

（5）（6）共に（4）と同じように「事」は出来事や事件といった意味であって、コトとその直前の語の修飾関係が「内の関係」である。コトが実質概念を持ち、物事の不在を表すことになる点、Dの表現と共通である。ところがこれらの例で不在なのは、「代々アトラツグ」や「此」ではない。「代々アトラツグ」や「此」と同程度の「メデタイ」或いは「うれしひ」物事の方が不在なのである。これは「ホド」や「ヨウナ」があることにより、「代々アトラツグ」や「此」と同程度の物事へ否定の焦点の移動が起こったことによると考えられる。この結果、「代々アトラツグ」及び「此」が最高であることになる。

E（明上276-8・298-8、明中204-7、明下52-10・111-7、記4-11オ-10、続1-8ウ-8）  
他22例

（7）（あい）「それこそ一だんの事なれとてもの御ちそうにしゝをまうて御めにかけられ候へ （して）「いやいつはりにて候それかしはしゝをまふたる事はなく候

（清63ウ8）

（7）では先ず言表事態において「まふたる」と動詞がタ形、かつその行為をする人（以下動作主体）及びナイ文の判断主体は共に話し手である。発話時点より以前における話し手自身の世界を描いている。そのため、現代語と同じように、経験表現になる。文末形式の持つ意味が経験となる例の中には、（5）のようにそれが発話時より以前に生じ、発話時である現在までを含んだ話し手自身の世界を描くものもある。

（8）（猿引）（略）かりそめに罷出ても、さきーでとめさせらるゝによつて、罷帰る事もなく久しうとめられています（明上257-9）

このような経験を表す表現は、名詞や接続表現「トモ」を下接することもある。

(9) (昆布売) いや思ひ出ひた、此こぶをうれ (大名) 諸さふらいにこぶをうれと云てうらふか、うるまひ (昆布売) さいぜん某ももつた事のなひ太刀をもたせた、身共もわかさのおばまでは、人に見しられたもので、よこぎをけがす、うった事がなく共うらずはうらせふ (明上288-3・288-4)

連体形の位置にも立ち得ることを合わせて考えると、経験を表す表現は客観的な事象をそのまま取り出して述べるものと言えよう。これらは、文末形式の直前の語が動詞のタ形ないしル形、動作主体・判断主体は共に話し手であるという共通点を持つ。ただし、動作主体の行為の生起は発話時より前の過去でなければならない。こうした場合、ナイ文の意味は経験となる。

F-1 (明下132-1・227-4、記1-17ウ-9・2-24オ-6、続2-34ウ-1・3-5ウ-16) 他21例

(10) ▲おな のふとつさま。あのやうにきて又なきやれば。いないでも。かなひますまひほどに。いなして下されい ▲おや いや。いなす事ではない ▲むこ おな。それちや。しうとへ。一度ふた度くれた。女房をば。もどすまいといふか。つれていて見せう (記1-19オ-1)

(10) では、話し手(親)が「いなす事ではない」と言ったのを受けて聞き手(むこ)が「もどすまいといふか」といっていることから、「いなす事ではない」は「戻すまい」と聞き手に受容される表現であると考えられる。さて、この場面に先だて、おやとおなとの間では、聲が娘を迎えにきても娘は帰さないということになっていた。

(10') ▲おや してまた。我は。しかと。いぬまひといふきか。かまひて。おやに。恥をか、すなよ ▲おな は。とつさま。なにしにいにませうぞ ▲おや おい。したらゑいは ▲おな のふ。とつさま。その恥しらずが。たづねてなど。くる事が御さろ程に。こゝへは。こぬとおつしやれい

文末形式の直前の動詞「いなす」というのは、動作主体がコントロールすることの可能な動詞である。「いなす事ではない」は話し手自身のこれからの行為についてその指針を述べたものである。そしてこれは既に交わされた約束に基づくものである。自分のこれからの行為の選択が自分に委ねられ、自分が選択した行為を宣言することとなる。結果として「いなす事ではない」は話し手の意志を表し、意味的に「戻すまい」と等しいことになる。又、文末形式の直前の動詞が意志の助動詞を伴っている例もある(次例)。(11)の場合にも、文末形式の直前の語が動作主体の意志によってコントロールの可能な動詞である点に変わりはない。

(11) (牛博勞) (略) かゝるありがたき牛を、れうじにいたさうずる事にてはなし

(明下132-1)

ところで、次に例示するように、自分のこれから起こす行為について「事ヂャ」という形式で規定して述べる例がある。

(12) (奏者) 子細聞ことじや、汝も雁の子細を申上よ (明上57-1)

(12) の「聞く」は自分のこれから行為である。現代語においても例えば「私は旅行に行く」と言えば、自分のこれから行為を言うから、意志の表現になるのと同様の表現であろう。したがって上述の文末形式「事デハナイ」はこの「事ヂャ」の否定形であると考えられる。

## F-2 (明中238-14)

F-1 の場合、動作主体は話し手であり、話し手の意志を表わすものであった。それでは、動作主体が聞き手の場合はどうであろうか。

(13) ▲はしめアト そのことじやたとへばわれらがしたにもせよ。最前何ごとにてもあれ。はらたてずくなしと。約束した上は。夫程にいふことではない ▲シテ 尤なれ共。ことによつたものじや。此ごとくに。ばうずにないてよいものか

(続 3-30オ-10)

(13) に先立って、シテとアドとの間では、(13') の如く何があってもがまんするという約束があった。ところが、この約束にも関わらず、シテは腹を立て、不満を言うのである。

(13') ▲シテ ヱ様に道同致すからは。自然腹の立ことがござる共。互に堪忍をいたいて。道同致さふ ▲アト 仰らるゝ通り。長の旅しや程に。ざれことをもせいでもかなはぬことじや。いかやうのことが有とも。かんにんをいたひて。道同いたさふ。

話し手 (アド) の「夫程にいふことではない」という言葉は、聞き手 (シテ) に対してのものである。聞き手の行為 (この場面では聞き手が不満を言う) を承けて、聞き手のこれから行動指針を示す発言である。この発言は先の約束に違反するために行われ、聞き手が、話し手の示した行動指針に則って行動するように働きかけるため、結果として聞き手の行為を禁止することになる。

## F-3 (続 5-16オ-14)

(14) (太郎冠者) これはいかな事、しぜんそれがしれたらは、中々たゞはおかせられまひほどに、ゑいたすまひ (吉田の何某) いやくる事ではなひ、かたふやくそくはしたれども、もしのぞく事があらふかと思ふての事じや (明下233-17)

言表事態の動作主体が第三者の場合もある。(14) において来るか来ないかが問題となっているのは、この場にはいない吉田の何某の妻である。この場面に先立って吉田の

何某と妻の間では(14')の様な話し合いがなされている。

(14') (吉田の何某) さらは一やのざぜんをいたさうほどに、しぜんおみややはむになる、かまひておみややるなや (妻) 心得ておじやる

この約束に基づいたものゆえ、「(妻は) 来ない」確率が高いものの、ところが、妻は目の前におらず、第三者である妻の行為は、言表事態の動作主体が話し手や聞き手の場合と異なって、話し手の言説の影響下にないのである。従ってこのような場合は推量を表すことになると思われる。又、文末形式の直前の動詞が助動詞を伴っている例もある。一例を挙げる。

(15) (太郎冠者) よう―みれは人ではなひくひじや、やひそこなものは人かくひか (主) くい (太郎冠者) くひじや、まことにさうであらふ、さいぜんからいごかぬ程に、さりながらくひならはくひとはいはふ事ではなひが、人か (明中127-4)

話し手(太郎冠者)の「くひならはくひとはいはふ事ではなひ」という言葉は、本来ならしゃべるはずのない杭がしゃべったことを承けての独白的な発言である。聞き手が杭(実は主が杭の振りをしている)であるため、返事のあったことを不審に思うニュアンスが有り、一般論として述べてはいるものの、話し手には「言わない」と規定しきれない点で(14)と一致し、やはり推量表現である。<sup>[2]</sup>

#### F-4 (続4-29ウ-15)

(14) (15) と同じく推量表現と考えられるものに動作主体が話し手や聞き手の例もある。

(16) ▲シ (略) 扱も―。のめばのむ程うまい。そちもちとのまんか。さそふ ▲女 いやわらはゝ。いやでござる。もはやあはせられたそふな ▲シ いや―。此様なことで。あふことではない。さあ―。つげ― (続1-17ウ-10)

(17) ▲シ (略) 少連歌を仕習しませ。(略) そなたか様にふつつかなつたなひ者も。ならぬことではない (続5-16オ-14)

(16) において、話し手(シテ)の「此様なことで。あふことではない」という言葉は、「この程度の酒の量では酔わない」ということを慮っての発言である。動作主体・判断主体共に話し手自身である。又、(17)において、話し手(シテ)の「ふつつかなつたなひ者も。ならぬことではない」という言葉は「ふつつか者でうまくなる」ということを慮っての発言である。動作主体は聞き手(妻)、判断主体は話し手である。

(16) (17) のような推量表現と先に(10)・(13)で述べた意志表現や禁止表現を分けるのは、文末形式の直前の動詞の性格である。すなわち、動作主体が同じように話し手(或いは聞き手)であっても、例えば動詞が「往なす」などのように動作主体の意志

によってコントロールできるものであれば意志表現となり、「酔う」などのように動作主体の意志ではコントロールできないものであれば、行為の結果が動作主体自身にもはっきりとは把握できないために、**推量**を表すことになるのである。

(10) - (17) のように、文末形式の直前の語が動詞のル形、ウ形である「事デハナイ」という形式は、モダリティ形式であった蓋然性が極めて高い。<sup>[3]</sup>この典型的な意味は、それが発話される以前になされた約束や暗黙の了解などに基づいて、話し手が自分自身・聞き手或いは第三者の行為を規定するものである。文末形式の直前の動詞が動作主体がコントロールすることのできる場合は、言表事態の動作主体が話し手なら意志、聞き手なら禁止、第三者なら推量表現となるものと思われる。文末形式の直前の動詞が動作主体がコントロールすることのできない場合は、動作主体に関わらず推量表現となるものと考えられる。

#### G-1 (明上417-14、明中193-17)

(18) (兄) 誰ぞ、いやしやてひか (弟) やらそなたはきこえぬ事をおしやる、いつ身共がしやていをした事が有て、そのつれな事をおしやるぞ (兄) いやこゝな者は、われはよそで人といさかふてきたか、酒にえふたか (弟) いさかはふ事もなひが、子細をしらぬ間こそせひもなけれ、今からはしやていとおしやつたらはき、まらずまひ  
(明下110-12)

話し手(弟)の「いさかはふ事もなひ」という言葉は聞き手(兄)に対してのものである。聞き手が想定した話し手の行為「いさかふ」に対して話し手が一方的に態度を表明する。自分の行為について自分で規定し聞き手に向かって提示するため、意志の告知になる。これらは、文末形式の直前の語が動詞のウ形、動作主体・判断主体共に話し手、という共通点を持つ。こうした場合ナイ文の表す意味は意志の告知となる。

#### G-2 (明上231-2、明中119-12)

(19) は冠者が栗田口を買おうと栗田口屋を探して呼び歩いている場面である。

(19) ▲すり いや、それがしに。あやつたが。仕合でおちやる ▲くわしや して。こなたは。あわた口屋で御ざるか ▲すり のふ。あわた口屋と。いふ事はない。それがしが。あわた口でおちやる (記4-6オ-1)

話し手(すり)の「栗田口屋と言う事はない」という言葉は、聞き手(冠者)に対してのものである。聞き手のこれまでの行為及びこれからの行為「栗田口屋と言う」に対して話し手の態度を表明する。そのため、現代語と同じように、聞き手のこれからの行為を抑止することになる。これらの共通点は、文末形式の直前の語が動詞のル形、動作

主体は聞き手、判断主体は話し手、の三点である。こうした場合ナイ文の意味は抑止となる。

これら G-1・2 は、発話されるより以前からある約束や暗黙の了解など、よるべき根拠なしに話し手が一方的に自らの行為を提示したり、聞き手の行為を規定する表現である。この点が F-1・2 と異なっている。即ち話し手と聞き手との間に共通の了解事項がなく、話し手から聞き手へ一方的に意見の提出が行われている。従って F-1・2 より主観性が高くなっているものと思われる。

### 3. モノ系について

A (清54オ8、明中73-16、記4-33オ-7・5-14ウ-7、続1-9オ-1・5-17ウ-5) 他5例

(20) ▲右京 やいそこなまち太郎。大名が庭鳥の。まねなどを。する物てはない  
▲下京者 して。ちやうせまいか (記4-36ウ-1)

(20) の言表事態「大名が庭鳥のまねなどをする」は、共通理解としてある大名がとるべき行為に反している。その言表事態に対して物デハナイと規定し、結果的に発話の内容が真であることを述べる点、先のコト系 A と同様である。コト系 A との違いは

(20) では言表事態における動作主体「大名」に話し手自身が含まれる点である(右京の身分は大名)。このように、言表事態における動作主体に話し手自身が含まれる場合、恒常的な事を述べるに止まらず、話し手の意志をも表わすこととなるのではなからうか。

(20) において右京が「大名が庭鳥のまねなどをする物ではない」と言ったのを、下京者が「せまいか」と受容したことも傍証となる。

B (清34ウ8、明上63-7、明中110-10、明下13-4、記4-5ウ-12、続3-2ウ-13) 他6例

(21) ▲ふつし はて。そなたは。仕合な人ぢや ▲いなか者 ぬ、 ▲ふつし いや。仕合といふて。袖つまに。ついてある物ではない。それかしに。あやつたが。仕合でおぢやる (記3-32ウ-3)

(21) における仏師の発言は「仕合とは何か」という主題に基づく解説である。助詞「ハ」によって「袖つまについてある物」と「それがしにあやつた(こと)」の二者が対比され、これらは排他的な関係になっている。焦点である「袖つまについてある物」が話し手の考えと不一致であるとされ、結果的に「それがしにあやつた(こと)」を指示することになる。又、同時に繫辞「デ」によるテーマと解説の結びつきも否定されている。この場合の否定は、コビュラ全体について行われている。コト系 B に類する表現であると思われる。



C (明上81-12・184-3、明中14-8・99-15、明下45-1、統5-24オ-1) 他10例

(22) ▲くわしや 中へ。身共が親が。子を三人持れて御さるが。兄あたりには。あとしきをやられます。身共は。ちのあまりにかわいが。とらせう物がない程に。せめて。中風なりと。とらせうとあつて。くられて御さる (記5-42ウ-5)

(22) の「物」は物品などといった意味である。この場合、モノとその直前の語「とらせう」の修飾関係は「内の関係」である。従って (22) のようなモノは実質概念を持つ。そのため、コト系Cと同じように物事の不在を表すと考えられる。

D (明上313-3、明中284-9・312-16、明下56-3・61-5)

(23) ▲シテ 大くわほうの大名。扱世の中に。慰はおほけれど。殺生程面白物はない。夫故毎日へ。此河内の禁野へ殺生に参る。(統4-23オ-1)

(23) の「物」は (22) と同じように物品といった意味であって、モノとその直前の語の修飾関係が「内の関係」である。モノが実質概念を持ち、物事の不在を表すことになる点、コト系C・Dやモノ系Cの表現と共通する。(23) で不在とされるのは「殺生」そのものではなく、「殺生」と同程度の「面白」物事の方である。これはコト系Eの場合と同様「ホド」によって焦点の移動が起こったためと考えられる。結果的に「殺生」が最も面白いものということになる。

#### 4. まとめ

以上、コト系とモノ系の言表事態とナイ文の意味について考察した。コト系のA-E・モノ系A-Dは、言表事態が世の中一般の恒常的な概念に関わることや話題を説明するものであり、客観的叙述に近い。これに対してコト系F-Gは言表事態に描かれた行為に対する話し手の態度の表明やそれを相手に持ちかけるものであることがわかった。もちろん、これらは完全に分離独立してはおらず、互いに連続的である。これは例えばコト系Aとモノ系Aにおいて、その言表事態はどちらも不変的、恒常的なものに関わっていないが動作主体に話し手を含むか否かによって発話の内容が真であることを述べるのみであるのか、話し手の意志をも表すことになるのかという差異が生じることからも窺うことができる。

事デハナイという文末形式については、話し手が、それが発話される以前になされた約束や暗黙の了解などに基づいてこれからの行動指針を示す、という典型的意味が得られ、事デハナイの直前に来る動詞と動作主体の違いによってナイ文の意味が意志・禁止・推量のように派生することが明らかとなった。そして、この事デハナイという形式がモダリティ形式であった可能性についても指摘することができた。

狂言資料を通して得られた用例について、言表事態とナイ文の意味の相関性を表としてまとめると次のようになる。<sup>[4]</sup>

表1：言表事態とナイ文の意味の相関性

言 表 事 態					修飾	ナイ文 の意味	分 類	
主 体		意 味 特 徴						
動 き	話し手	行	コント	可	ル形・ウ形	有	意志	コト系F-1
	聞き手		ロール		ウ形	有	禁止	コト系F-2
	第三者				ル形・ウ形	有	推量	コト系F-3
	話し手聞き手			不可	ル形	有	推量	コト系F-4
	話し手	為	制限なし		ウ形	無	告知	コト系G-1
	聞き手				ル形	無	抑止	コト系G-2
話し手			タ形・ル形	無	経験	コト系E		
状 態	総称	恒常的事実				無	不成立	コト系A
	総称含話し手					有	意志	モノ系A
	事物	連体修飾（「内の関係」）				無	不在	コト系C・D、モノ系C・D
	主題	解説				有	解説	コト系B、モノ系B

さて、以上の分析によって、ナイ文の意味が決定されるにあたり、文の言表事態にどのような世界が描かれるかということとナイ文の意味の成立に高い相関性がみられるといえる。この点は注目しておいてよいのではなかろうか。

## 注

- 1 使用したテキストはそれぞれ次の通りである。古川久1964、『狂言古本二種』、わんや書店／池田廣司・北原保雄1972、『大歳虎明本狂言集の研究』、表現社／北原保雄・大倉浩1983、『狂言記の研究』、勉誠社／北原保雄・小林賢次1985、『続狂言記の研究』、勉誠社。
- 2 この場合は「杭がものを言う」という事態の成立そのものに対する話し手の確信度が低くなっている。この点で(14)のような「妻は来ない」という確信を持った発言と異なっている。これらはどちらも推量であるが、そのし方が異なっていると考えられる。
- 3 (18)では動詞が「ならぬ」となっている。今回は一応ル形としておくが、今後、動詞の否定形に指示される「時」がいつであるのかを明らかにする必要がある。
- 4 これら以外に考えられる組み合わせもあるが狂言資料に用例がないため挙げない。今後、他の文献を精査して偶然用例がないのか、体系的欠落なのかを補う必要があろう。

## 参考文献

- 揚妻祐樹1990、形式的用法の「もの」の構文と意味、『国語学研究』30
- 石神照雄1990、否定と構文、『日本語学』9-12
- 奥津敬一郎1980、「ホド」一程度の形式副詞一、『日本語教育』41
- 河西良治1982、否定に関するノート、『中央大学文学部紀要文学科』49・50
- 久野 暉1973、『日本文法研究』、大修館書店
- 寺村秀夫1975、連体修飾のシンタクスと意味（1）、『日本語・日本文化』4  
1979、ムードの形式と否定『英語と日本語と』、くろしお出版  
1984、『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版
- 仁田義雄1991、『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- 益岡隆志1987、『命題の文法』、くろしお出版  
1989、『日本語のモダリティ』、くろしお出版
- 三上章1955、『現代語法新説』、刀江書院
- 森田良行1969、日本語教育における文法の問題―「ない」の用法を中心に―、  
『講座日本語教育』5、早稲田大学
- (くやま けいこ 岡山大学大学院)